新しい中国文学

灯火

ともしび

2016

特別版

撮影／李雲雷

FOREIGN LANGUAGES PRESS

目次

小説 004

李敬沢　趙氏孤児　4

『枕草子』と「貧しいペルシャ人」、そして真珠　28

董立勃　西瓜を殺る　34

蘇童　西瓜舟　48

葉弥　明月寺　72

艾偉　村の映画会　84

朱山坡　魂の授業　94

徐則臣　グスト城　112

編集後記 130

訳者紹介 132

2016 特別版

ISBN 978-7-119-10119-4

版権 / 中国　北京　外文出版社有限公司　2016

出版 / 外文出版社有限公司

中国　100037　北京市百万荘大街 24 号

http://www.flp.com.cn

E-mail: flp@cipg.org.cn

発行 / 中国国際図書貿易総公司

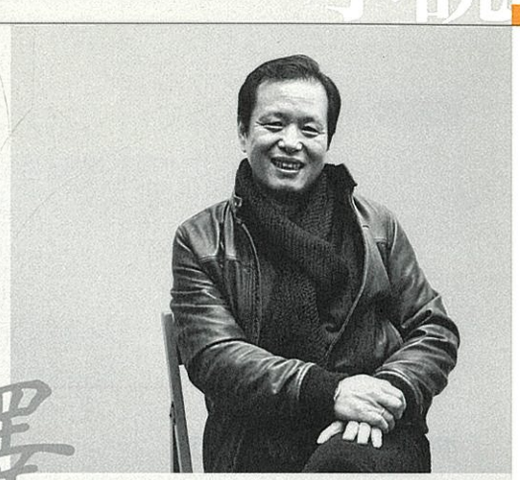
中国　100044　北京市車公荘西路 35 号

私書箱　中国　北京 399

印刷 / 中華人民共和国

小説

李敬澤



李敬沢（り・けいたく　リー・ジンゾー）は一九六四年、天津生まれ。北京大学卒。中国作家協会副主席、同書記処書記。中国で最も権威ある文芸雑誌『人民文学』の元編集長で、英語版「PATHLIGHT」などの外国語版を創刊。著名な文芸評論家であり、中国の作家たちに畏怖される存在でもある。幅広いスタイルの作風の作家としての顔もあり、『検証千夜一夜――二一世紀初の文学生活』、『文学のために申し開きをする』、『反遊記』、『小春秋』、『理想的な読者へ』などの著書がある。華語メディア文学大賞評論家賞、魯迅文学賞文学理論評論賞、『羊城晩報』花地文学賞年度評論家金賞など受賞多数。有名な映画監督・張芸謀の文学顧問にと請われて断ったという逸話もある。

「趙氏孤児」は司馬遷の『史記』にも出て来る史実をもとに紀君祥が元曲の芝居として創作した中国の有名悲劇の一つで、一八世紀にはヴォルテールによって翻案され、ヨーロッパで舞台化された最も古い中国の芝居でもある。中国でも繰り返し京劇などの伝統演劇や話劇の舞台、テレビドラマに取り上げられ演じられてきた。近年では陳凱歌が映画化、邦題『運命の子』として二〇一一年に日本でも公開されている。それらのよく知られた「趙氏孤児」は、霊公殺害の冤罪で趙家が将軍・屠岸賈によって一家全滅の罪に問われた際、趙家に恩のある公孫杵臼や程嬰らによって助け出されて一人生き延びた趙盾の孫の趙武が長じて一家の仇討をするという復讐譚である。李敬沢のこの小説はその有名譚のエピローグ、またはスピンオフともいえる内容になっていて、霊公と趙盾との確執に中国の現代にも通じる諸問題を見出すという、単なる歴史小説を超えた語り口が面白い。

「枕草子と貧しいペルシャ人、そして真珠」は、『枕草子』と唐代の警句集『雑纂』、小説集『独異志』にある「貧しいペルシャ人」について、その文章様式と美意識を論じている。「貧しいペルシャ人」は、独り異郷で死を待つ貧しいペルシャ人が、看病してくれた唐人に富の象徴である「真珠」を贈ろうとするが、唐人はその真珠を受け取らず遺体と一緒に埋葬するという説話である。近年は中国の経済優先の側面を強調する報道が多い。それと対照的に作者は、国際的に繁栄した唐代の説話に描かれた人々の美意識（見知らぬ旅人への慈悲、富に対する姿勢）に目を向けた。このような作者の関心のあり方が興味深い。

趙氏孤児

李敬沢

王妃の陳情

毎日、朝から晩まで、女は産着にくるまれた赤ん坊を抱いて朝廷で大泣きした。

悲しんで泣き、憤慨して泣き、繰り返し問うた。

「夫がどんな罪を犯したというの？　この子に何の罪があるというの？　新しい君主を別に立てて、この子をどうするつもりなの？」

朝廷は仕事にならなかった。趙盾（ちょうとん）は家に閉じこもって登朝して来ない。ほかの大臣たちは毎日この孤児と未亡人が泣くのを横目で黙って見やりつつ仕事をしていた。

隠れおおすことは出来ず、女はとうとう趙盾の邸の門前にひれ伏し、額から血を流すまで叩頭して、固く閉じた門に向かって問うた。

「先王がこの子をあなたに託した時、なんと言ったか覚えてる？　『宰相よ、この子が将来大物になったら、そちの恩義に感謝する。大物にならなかったら、あの世でそちを恨むぞ』と仰ったはず。いま、その先王のご遺体もまだ冷めやらぬうちに、この子を放り出すとは一体どういうことなの？」

答えはなかった。もちろん趙盾にはすべて聞こえていた。黙って座ったまま、己れの政治生命が最初の危機に瀕しているのを感じていた。

紀元前六二一年、晋の襄公（じょうこう）が崩御した。偉大な文公の継承者として、襄公は適任だった。父親に仕えたのも中国史上稀に見る巨人たちだった。当時の晋国は豪傑を輩出し、大臣たちの親の世代も英雄なら、その子の世代も英雄で、襄公を補佐して晋国の覇権の維持と拡大に貢献した。いま、その襄公が死に、彼の幼い息子はまだ乳飲み子だった。大権を掌握した宰相の趙盾は人も驚く決断をした。「子どもは晋国の王位に就くにふさわしくない。晋国は年かさの成熟した君主を立てるべきだ」と言ったのだ。

趙盾は頭がおかしい。春秋時代から清末まで、幼児を即位させるのは野心と能力ある男女にとっては王朝の最高権力を手中にする唯一の合法的チャンスだ。趙盾以外にそのチャンスを放棄した者を私は知らない。エホナラ氏（満洲族貴族の氏族の一つ。西太后はエホナラ氏族出身）のように、彼らはそういうチャンスを作って、永遠に王宮を幼稚園にしようとしたのだ。

だが、趙盾はこう言った。「この子はまだ小さく、物が分からない。もっと物の分かる者を捜すべきだ」

後にある者が趙盾の政敵の賈季（かき）に聞いた。「趙衰（ちょうすい）と趙盾のどちらが賢いか」後世であれば賈季はきっとこう言ったことだろう。「けっ！　父親が父親なら息子も息子さ。どっちも大バカ者だ」だが、時は春秋時代なので賈季もそんな捨て台詞は吐かず、自分がその大バカ者に叩きのめされたとも思われたくないので、重々しくこう言った。「趙衰は冬の太陽

なり。趙盾は夏の太陽なり」

冬の太陽は暖かく、いとおしい。だが、夏のギラギラ照りつける太陽は正視できないほど怖ろしい。趙衰は趙盾の父親で、かつて文公に従い戦場で功績を立てた。一方、趙盾は高貴なダイヤモンドで、貴族政治の完璧な結晶であり、残酷で汚ない下層の政治闘争も知らず、卑屈さのかけらもなく、目は遠く彼方を見つめ、才能は隠しようがない。自分が受け継いだのが周囲の強敵に虎視眈々と狙われる国であることを熟知していた。夷狄に秦国に楚国。もちろん、趙盾は二十一世紀のネトウヨとは違い、周りの全てを敵に回し、その全員と戦うことが己が覇者にのし上がったことを示す最良の方法だとは思っていなかった。とりあえずの急務は国を強力かつ立派にすることであり、そのためにすでにこの国の政治、経済、法律、軍事などあらゆる制度に改革のナタをふるっていた。趙盾が見るに、この国には強力な君主が絶対に必要であり、そのためには自分の命に換えても尽くす決意を固めていた。

となれば後は簡単で、残るはどこでそんな王を見つけるかということだ。もちろん趙盾には考えがあった。彼は襄公の異母弟の一人の公子雍に目をつけた。雍の母親は秦国の人で、本人もその時、秦国で暮らしていた。趙盾から見て、資格と品行以外に、雍を選ぶことにはもう一つ重要な長所があった。それによって秦国との緊張関係を緩和できるということだ。

すべて順調だった。だが、賈季は反対だった。趙盾に次ぐ重臣の賈季には別に候補がいた。それが誰であるか、ここで述べる必要はない。いずれにせよ、このゲームにおいて別の名前を挙げることは自殺行為に等しかった。賈季は趙盾と言い争ったが当然勝ち目はなく、話し合いが終わると家にも帰らず、そのまま城を出て夷狄に身を投じることになった。

時を置かず、趙盾はすぐさま先蔑と士会を秦国に使いに出し、雍を王として迎え入れることにした。これで秦国と晋国は子々孫々にわたって友好関係を築くことが出来る。この時、穆公はすでに死んで康公が後を継いでいたが、話を聞くや、渡りに船とばかりにこう言った。

「お二方はどうか先にお戻りください。こちらでいろいろ手配をして、すぐに送り届けましょう」

すべて順調だった。だが、賢い趙盾にも思いつかないことがあった。亡くなったばかりの襄公の妻のことである。思いついたのかもしれないが、この生まれつき身分の高い貴族の御曹司は、よもやこの女がそんな大騒ぎを起こすとは思いもよらなかった。この女は、確かに政治に疎く何の権利も勢力もない、ただの忘れ去られた弱者だったが、強者が語るのは政治と戦略だが、弱者にあるのは天の理と人の情である。この女はもはや尊い地位にある王妃ではなく、夫を亡くした妻であり、赤子を抱えた母親である。その彼女が陳情して、尊厳も投げ出し、こうしてひれ伏して、納得させてくれ、公正な扱いをしてくれと、大臣たちに求めているのである。

趙盾はようやく自分が大変な面倒を引き起こしたことに気がついた。当時の彼はその女を労働改造所に送りつける

ことも知らなかった。趙盾の偉大な戦略も高遠な理想も泣き叫ぶ女の前で色褪せ、彼を支持し彼に従う人々も気まずそうな顔になり、ためらいがちになった。趙盾は彼らを見つめるうちに微かな人民の怒号が聞こえてきた。趙盾はネットで炎上し後ろ指さされる罪人となり、恩を仇で返し孤児と未亡人を虐める悪人となってしまっていた。

二千年以上も前の夜の日々、趙盾は孤独だった。自分がなぜ小人になってしまったのかが分からなかった。新しい君主を立てると決意した時、自分自身の損得を顧みず、すべては晋国のためだと考えた。だが、いま、この若くして権力の頂上に登りつめた彼は、突然、政治がいかに難しいものか、ささいなことが大事となり、大事は実は小事であり、いいことは悪いことに、悪いこともいいことになり得ることを悟った。自分は一心に善人になろうとしていたのに、いつの間にか人々が誅すべき悪人になってしまっていたのだ……。

翌朝起きると趙盾は群臣を召集して、こう宣告した。

「雍は帰らなくてよい。今日、私はこの子を抱いて王位に就かせる」

だが、この時、雍はすでに黄河を渡っていた。どうするのか。「すみません、気が変わりました。注文は取り消します」とでも言うのか。届けられたのは宅配便ではなく、秦の大軍なのだ。「すみません」のひと言で追い払えるのか。

戦争しかない。戦争と言うは易しいが、戦って勝つのは難しい。幸い、晋には百戦練磨の軍隊があり、趙盾も生まれながらの統帥であった。あっという間に秦軍を蹴散らしてしまった。そして幼児が即位し晋の霊公となったのである。

歳月が流れて、霊公は成長し、歴史に名を残すうつけ者の暴君となった。その時の趙盾の思いはいかばかりであったか。

二つの取るに足らないこと

前回は紀元前六二一年、晋の襄公が崩御し、趙盾が執政となったところまでを話した。意気揚々と位に就いたが、最初にしくじってしまった。襄公の幼い息子を脇に押しやり、わざわざ秦に行って、子どもの叔父を君主に迎えようとした結果、子どもの母親が陳情し世間が大騒ぎになった。この件は動機は良かった。ほとんど聖人のようだった。だが、政治というものは動機が良くても必ずしも結果が良くなるとは限らない。理想が良くても、良い政治とはならないように。趙盾もインテリではないので、凡庸なのに道徳家ぶって、政治の可能性を信じざるを得なかった。もちろん、晋が荒れ果てても良い、そこらじゅう墓だらけになっても良いと思えるなら、何も怖いことはなかったが、趙盾としてもそこまでして自分の理想を押し通すつもりはなかった。

そこで考えた末にやむを得ず妥協をした。王妃は皇太后となり、赤ん坊は国王となり、孤児と未亡人は公正を取り戻し、天理にも人情にも合致して、晋国人民も満足した。もちろん十数年後には、これが愚かな選択だったことが証明されるのだが、この時は誰が知るだろう。天には天の配

剤があり、人はただ目先の理念に合っていると思われることしかできない。

以上は大事であり、ここでは二つの取るに足らないことについて話そう。

取るに足らないことの一つは趙盾と賈季が仲違いしたことだ。二人とも重臣で趙がトップ、賈季がナンバー・ツーである。評議委員会が開かれると、趙も賈も共にこの子ではダメとパスし、続けて趙が子どもの二番目の叔父を選ぶと、賈は三番目の叔父が気に入った。二人は拳を握って睨みあい、対峙することしばし、賈季は咳払いをして言った。「ちょっと、トイレへ……」

そして賈季はそのまま馬に飛び乗ると必死で駆けて逃げ出した。

要するに趙盾の勝利である。賈季の逃げ足がもう少し遅ければ命はなかっただろう。だが、彼は逃げて夷狄に身を投じた。「天は青々と野は茫々とし、風が吹き、見渡せば、牛と羊が現れる」（出典は南北朝時代の民謡『勅勒の歌』）その羊を放牧しているのが賈季である。趙盾は少し考えて腹心の臾駢を呼びつけると命令した。「賈季の女房子どもを奴の元に送り届けてやれ」

これこそ度量というものだ。賈季は逃げなければ生きてはいなかった。だが、逃げた以上はその女房子どもに当っても仕方ない。その女房子どもが自分を怒らせたわけでもない。自分はそんな嫌らしい人間ではない。ただ問題は、趙盾は知らなかったが――私は知らなかったのだと思うし、趙盾がそんなに嫌らしい人間だとは思いたくない。――臾駢と賈季の間には過去に因縁があったのである。いま、仇の女房と子どもの命は自分の手の内にある。臾駢はどうしたか。

臾駢の手下たちはどうすべきかを知っていた。臾駢を囲んで旗を振って叫んだ。

「仇を討つ時が来ました！　二人ともぶち殺しましょう！」

殺しても宜しいですか。いいですよね。賈季は逃亡した国賊です。残ったのは素手の女子どもだけです。英雄たちはいま、手を出さなくて、いつ手を出しますか。レンガや鉄の鎖は何のためにあるのですか。こうして殺すのは殺人ではありません。強奪するのも強奪ではありません。これは正しい政治観であり、天に代わって道を行うことなのです。

だが、臾駢の答えは「いかん」だった。臾駢は言った。「『前志』にこういう言葉がある。『敵の恵みも恨みも後嗣になし。忠の道なり』」

部下たちは目を白黒させて意味が分からないでいた。そこで後の注釈家はため息をついて解説に乗り出す。敵とは対する相手を指す。つまり、人に恩恵を与えても、その子孫に見返りを求めるな。人に恨みがあっても、その人の子を殴るな。でなければ、それは八つ当たりである。卑怯である。臾駢は続けて言った。「人の寵を借りるは勇にあらず。怨み損ない仇を討つは知にあらず。私を以て公を害すは忠にあらず」――もう解説はやめておく。とにかく、臾駢の意図は、自分と賈季とは確かに因縁がある。自分でいつか

挿画／王焱

落とし前はつけるが、相手の家族に手をかけるのは情けないではないか、ということだった。

もちろん、何が勇で、何が知で、何が忠かは、私たちと臾駢との認識の間には大きな違いがある。臾駢が思っている情けないやつを私たちは英雄だと思うが、臾駢はそのレベルの英雄になりたくなかった。自ら護衛して、仇の女房子どもを貴重品と共に国外に送り出した。

取るに足らないことの二つ目。

先に述べたごとく、趙盾は秦にいる子どもの叔父を選び、先蔑と士会に迎えに行かせた。二人はこれはおいしい仕事だと思った。初春の枝を独占するようなもので、誰よりも先に新しい指導者とお近づきになれるのだ。喜び勇んで出かけた。用件を済ませ帰る段になって情勢が激変した。王はすでに即位し、秦のあの方は王ではないどころか、バカ者になってしまった。兵を出して追い払わなければならない。そこで秦と晋の争いとなり、晋が大勝した。先蔑と士会は正しい立場にいたはずなのに、出かけて帰ってみると形勢は変わり、いつの間にか、誤った立場に置かれていた。このままでは命も危ない。そこで、どちらともなく二人は逃げ出して、秦へと亡命した。

前回来た時は賓客としてだったが、今度は負け犬としてである。秦での日々もうらぶれたものだったろう。そうこうするうちに三年が経ったが、士会は一度も先蔑と会わなかった。先蔑が玄関を入ったと聞くと、すぐさま裏の塀を乗り越えて逃げ出した。ほとんどオリンピックの金メダリスト並みである。

朱山坡

朱山坡（しゅ・さんは　ジュー・シャンポー）は一九七三年、広西チワン族自治区北流市の生まれ。本名は龍琨（りゅう・こん　ロン・クン）。専門学校卒業後、玉林市の政府機関の仕事に従事する。仕事の傍ら、「漆」という詩のグループの中心的存在として活動していた。二〇〇四年、余華の作品を読んで感動し、封印していた小説の執筆を開始。翌年『花城』に投稿した「僕の叔父于力」が掲載され、これが彼の出発点となる。二〇一〇年に「陪夜女人（夜を伴にする女）」で第一回郁達夫小説賞を受賞。

朱山坡の作品にはしばしば「米荘」という農村が登場する。これは莫言の「東北郷高密」や賈平凹の「商州」、徐則臣の「花街」を想起させる。この小説「魂の授業」（原題「霊魂課」、『収穫』二〇一二年第一期）も「米荘」という村から都会に出てきた若者や老婦が登場する。

一階は「寿衣店」（死者に着せる衣服・帽子・靴や骨壺など葬儀関連の品を売る店）、二階はお骨を預かる仮安置所「簡易旅館」で働いている青年の「僕」と農村から来た老婦とのやりとりを通して、若い「農民工」（農村からの出稼ぎ労働者）の生態と意識の変化を描いている。老婦は、都会の建築現場で働く息子がすでに死亡したと思い込んで、精神に変調をきたし、都会に出て息子の魂を探そうとする。老婦の息子は都会で暮らすことを決め、村に帰ろうとしない。だが、息子の死は現実のものとなる。若者が金と欲望につられて大量に都会に流れる風潮の中で、定まらない魂が都会の上空を浮遊している。魂は存在するのかという「僕」と老婦のやりとりの場面など、一種独特の雰囲気を持った小説で、拝金主義、精神の荒廃へのさりげない批判が見られる。

朱山坡のブログ（二〇一四年一月五日）によると、この小説はある病院の近くの「寿衣店」の二階の倉庫に寝泊まりする若い大卒の女性店員から聞いた話と、葬儀場の建物が大雨で壊れて安置されていた骨壺が街に流れ出たという新聞記事から着想を得たという。

朱山坡の小説は本作品のように、下層社会に生きる人々を温かな視点で描いたものが多いが、一見荒唐無稽に見える寓意性のある作品も手掛けている。邦訳作品には「叫び」（『灯火』二〇一五）がある。

今回の訳文の初出は『中国現代文学』一二号（中国現代文学翻訳会編、ひつじ書房、二〇一三年）であるが、今回転載にあたって一部加筆・修正をした。

魂の授業

朱山坡

民主（ミンジュー）

バスターミナル、西に行くと、景観の美しい霊山（リンシャン）。大道で、突き当りに斎場があった。店のほぼ真向いの大きな電柱の片側には一九番、二七番、三二三番、三九八番系統の路線バスの乗り場がある。バスが停車するやいなや、乗客がどっと降り、別の乗客が押し合いへし合い乗り込む。ドアが閉まると、南湖（ナンフー）食品市場や海洋（ハイヤン）公園の方角に乗客を乗せて行く。ここで下車する乗客たちは、一部は大通りを横切って向かいにある五月花団地（ウーユエホワ）か民族綿紡績工場に吸い込まれていき、一部は店の角を曲がって通用門からがんセンターに入る。そこへ行く人たちは、患者か患者を見舞う人がほとんどで、何かしら患者と関わりがあり、中には死後の始末に行く人もいた。思案気に足早に病院に向かう人たちは、めったに笑顔を見せることはなかったが、たまに笑みを見せたとしても道のほこりや車の排気ガス、ホルマリンの匂いにすぐにかき消されてしまう。だが、とにかくここはにぎやかな通りで、人や車がひっきりなしに行き交う。多くの店は狭い場所を争うようにして店を出し、置くべき品物を店頭にいっぱい並べている。足の踏み場もないようだが、通行人も見慣れていて、葬儀用の特別な品物に足をとられても驚きの声をあげることもなく、落ち着いて顔色ひとつ変えない。中には偶然見上げた頭上の看板の店名に普段は動じないのに思わずぎくっとした顔を見せる人や、ぞっとして笑い出す人もいて、その虚ろな表情を際立たせることになった。

この周辺には死に装束（死者に着せる衣服や帽子、靴、帯など）を売る店が軒を連ねている。棺桶屋もあり、ところどころに花屋、線香やロウソクを売る店、ファーストフード店もあった。僕が働いているこの店は、実は一階と二階の二部屋で、一階が死に装束をあつかう店、二階が「簡易旅館」になっていた。部屋は狭くて、一部屋が二、三十平米ほどだった。店の主人は中年の女性で、善良で頭がよく、気持ちのやさしい人だ。僕は彼女の夫をほとんど見かけたことがない。聞けばよそに女がいるということだった。店の仕事は割と忙しかった。店では客を呼び込むために、悲しそうな表情の通行人を見ては、その場にふさわしい表情と言葉で引き止め、ひととおり慰めてから、いろんな種類の死に装束を勧める。亡くなった人は男か女か、痩せているか太っているか、身長、年齢、地位、生前の好みをはっきり尋ねる必要があった。たいていの客はけちをつけてくるし、気性があらいので、細心の注意を払わなければならない。簡易旅館のほうは閑散としていて、たまに一人、二人、お客がきても物を置いていくか取りに来るかすると、すぐに帰ってしまう。あるいは置

路と普陀（プートウオ）路の交差する一角の左寄りの一等地にその店はあった。東に行くと、白沙（バイシャー）長距離

いた物をちょっと見ると、安心して立ち去ってしまう。彼らの話し方は僕らよりも遠慮深く丁寧だ。死に装束を売るには特別な言葉やタブーがたくさんあり、それに専門の知識も必要だ。女主人は僕が新米で、口もよくまわらないし、まだ専門的な話もできないのを嫌って、働きながら仕事を身につけていくようにさせる一方、主に簡易旅館の客の接待の仕事を任せてくれた。

通常、僕は客を案内して狭い階段を、足音を潜めて二階にはい上がる。二階も一部屋で、内装は格調高い。木張りの暗紅色の床、壁は浅緑色のタイル張りで宗教画が描かれている。キリストに聖母マリアに天使、それに仏陀、羅漢、道士がほどよい位置を占め調和を保っている。濃紺の天井にはきらびやかな雲と金色に輝く宮殿が描かれている。電気をつけると、神々しい光がやさしく部屋中を包み込む。薄い絹のカーテンだけなので、電気をつけなくても部屋全体はほどよい明るさだ。僕たちはこの部屋を簡易旅館と呼んでいた。旅館は広くはなかったが、三、四十人の客がいても、混み合っているという感じはなかった。一人分が占めている面積はわずかで、整然と、じっとして動かず、しかも異様に静かだったからだ。客は素性がわからず、お互い顔みしりではなかったが、仲よくしていた。客たちは橡の木の棚に、本が一冊一冊本棚に整然と並べられているように置かれている。客たちは漆塗りの黒い骨箱に入れられ、箱には見知らぬ名前が刻まれているものもあれば、何の表示もしていないものもある。箱はそれぞれ二層になっていて、一層目にお骨が入り、二層目に彼（彼女）の魂が安置される——彼（彼女）の魂が安息を望めばの話だが。

「最初の、そこの骨箱は母のもので、母はここに三年間客たちと一緒にいて、仲間ができたの」女主人は言った。「母は父を待っていた。父は十年前に別の女と出ていったのよ。母は死ぬまで父が帰ってくると信じていた。父のお骨が帰ってこなくても少なくとも父の魂が自分のもとに帰ってくると信じていたのよ——人は亡くなってから後悔に気づくものね。父の魂は傷ついた母のもとに帰って懺悔しようとするわ。母は父と一緒に春の日に埋葬されることを待ち望んでいた。父はまだ青島（チンタオ）にいて、健在よ。はじめこの部屋は物置として使っていた。母が自分で簡易旅館にし、いずれはたくさんの魂がしばらく仮住まいする場所にと考えていたんだけど、母が第一号の客になるなんて思ってもみなかったわ」のちに何人かの友人が肉親を置いておくところがなかったので、ひとまずここを仮の置き場とし、次第にここが死者の簡易旅館となった。旅館には名前がなかったし、店の登録も税務登録もしていない。だからあまり知られていない。せいぜい地下旅館といったところだ。でも、知っている人には魂の簡易旅館と呼ばれていた。いきどころのない魂がしばらくやすらかに眠り休憩する場所なのだ。だが、いずれ客はここを離れていく。死後、異郷にとどまることを望む者は誰もいないからだ。

もちろん、僕は客にこんなことを説明する必要はなかった。それほど大切とは思えなかったからだ。大切なのは、まず初めに「気をつけて話してくださいね。お客さんを驚かせてはいけないし、お客さんの郷愁を誘ってもいけないんです」ということを毎回客に伝えることだった。そのあと、僕は簡易旅館の概要と規定を簡単に説明し、ここがほかの斎場よりもずっと安くつくし、ずっと手厚い管理をしている点を強調した。

旅館への来客は、どう言ったらいいか、権力者や金持ちというような人たちではなかった。ほとんどがその都市に戸籍のないよその土地から来た人たちで、この都市をさまよっている定職のない人たちだった。彼らがあずけにくるのは肉親や友人で、異郷で客死したが、急いでふるさとに埋葬しなくてもいい、取るに足らない魂だった。彼らはしばらくここに安置しておき、旧正月まで待つか、死者の肉親の悲しみが軽減するまで待つか、あるいは安い管理費すら払えなくなってから、田舎に連れて帰った。死んだら田舎に連れて帰らなくてもいい、華やかな都会の生活を十分に味わっていないし、家やら車やらをまだ購入していないうちに志半ばにして田舎に帰ったのでは人にばかにされるし、自分自身も耐えられない、と生前に伝えておく人もいた。こういう人たちが僕たちの旅館の常連の長期「滞在者」となるのだった。

旅館は兼業だったので、女主人はここからの多くの収益を望んではいなかった。実際、旅館の商売は実入りが少なく、時には半月か一か月も客が来なかった。ときたま来てもそれはこの旅館に新たなメンバーが加わったというだけのことで、僕は規定どおりにこの新たな客に番号を貼り、彼（彼女）一人分の位置をきちんと確保した。客は普通何も言わず、自分が持ってきた骨箱が落ち着き場所を得たことを確認して、そそくさと立ち去ってしまう。僕は通常彼らに肉親や友人の番号を覚えておくように伝え、「毎月の管理費の支払いを忘れないように」と好意から注意する必要があった。客は女主人の振込先と連絡先が印刷された名刺を僕から受け取る。僕は手渡しながらこう伝えた。「この五年間、よそでは住宅の価格が急騰し、部屋代も月ごとに上昇しています。斎場の費用も申すまでもありません。でも、ここでは一銭も値上げしていません」

都会の人が貸し出す部屋のように、この旅館にも管理費の滞納があり、一年や半年一銭も振込のない者もいた。電話をかけると、言いわけする者もいれば、すでに電話が使われておらず、つながらないところもあった。女主人はやさしい人だったので、ほったらかしにされた「滞在者」の骨箱を処分してしまうことはなかった。「もしその人が生きていたら、きっと支払いが滞ることはないはずよ」女主人はやはり僕に他の人と同じように扱うように求め、厳かでほの暗い光が出るように骨箱を拭きなさいと言った。その頃、僕はこの町でもうすでに二、三年何とか暮らしていたが、まともな仕事が見つからず、ますますお金もなくなり困り果てて

いた。ともに苦労してきた恋人もついに僕のもとを去っていった。生計のために、肉体がこの煩悩の多い世とはすでに無縁になった人たちと一緒に過ごす仕事を僕は受け入れ、彼らの部屋代の一部が僕の部屋代となった。しばらくするうちに彼らは僕と親しくなり、僕は骨箱同士がささやきあったりする声を聞くことさえできるようになった。夢だとか苦労だとか無念さ、それに悔しさや我慢できないこととか、仕方のないことなどが彼らの静かな外面から溢れ出してきて、塵埃（じんあい）が漂うようにそっと空中を漂った。

ある日、変わったお客がやってきた。

その日僕が骨箱を拭いていたところ、階下から女主人が大きな声で僕の名前を呼ぶのが聞こえた。僕は急いで一階に降りた。階段の下で白い風船に目がとまった。一人の老婦が階段の下で僕を待っていた。背が低かったが、身長よりずっと高い杖をついていた。その杖の先端に半分ほど膨らんだ白い風船が結びつけられ、不規則に揺れていた。ぼさぼさで汚い白髪、つやのないかさかさの顔、背は少し曲がり、軽度の白内障を患っているらしく、目を僕の体に近づけてはじめて僕のことがはっきり見えたようだった。口を開けて話をすると、きつい口臭がした。まともな歯は一本もなく、口は窪んで落ち込み、身に付けている暗灰色の手織りの綿の服は泥だらけだった。

「ねえ、お兄さん、二階の息子のところに連れていってくれないかね」と老婦は単刀直入に言った。僕も老婦の言う意味がわかった。客が肉親や友人の骨箱を見にくるときにはたいていこのように直接的に言うからだ。

私について上にきてください。僕は言った。

手を貸してくれないかね。老婦は僕に向けて片手を差し出した。「この階段は生きている人間用にはできていない。杖も役に立たないね」

僕は少しためらった。階段は少し狭いが、そんなに急ではない。

女主人はちょうど別の客と話をしていて、忙しそうだったが、振り向いて僕に言った。「田舎から歩いてこられたんだよ。百数十キロの道のりを五、六日かけてさ。疲れただろうに、手を貸してあげたら」

老婦の靴はぼろぼろで、泥まみれだ。女主人の言い分はどうやら確かだった。

僕はしかたなく老婦に手を貸したが、二、三段しかあがらないうちに老婦は息切れがして動けなくなってしまった。「ずっと歩き通しだったんで、足が言うことを聞かなくなってしまったよ。おぶってくれないかね」

僕はしぶしぶしゃがんで老婦を背負った。老婦は軽かったが、全身から悪臭が漂い、僕は気分が悪かった。

二階に上がった。老婦は僕の背中から降りると、しっかり立って、部屋のなかにぎっしり並んだ骨箱をじっと眺め、ウ、ウーと泣き出した。声は小さく、かすれていた。泣いているのではなく、声を絞り出しているように聞こえた。

挿画／王淼

「おばあさん、息子さんはなんという名前でしたか」僕は気持ちのこもった慰め口調で訊ねた。

「闕小安（チュエ・シアオアン）というんだよ。私の息子を知っているのかね」老婦は骨箱を見ながら訊ねた。

僕は知らなかった。実を言うと、骨箱の中の人を僕は誰一人として知らなかった。生前に面識もない。骨箱に入ってしまうとみな同じ姿になってしまう。白くて柔らかく、こなごなで、ばらばらになる。箱には写真もついていない。

僕は言った。どこにいるか探すお手伝いをします。しかし、闕小安という名前は初耳で少しも印象がなかった。僕は登記簿を繰ったが、確かに闕小安という名前は見当たらなかった。

「いとこがここに持ってきたんだ。私が耐えきれないことを心配して家に持ち帰らなかったし、死んだことを知らせてくれなかった。でも、私には分かってる。自分の息子が死んだかどうかを知らないなんてことがあるものかね」老婦は怒りの表情をあらわにした。「いとこが知らせてくれなくても、小安を見つけられる――私にはこの子しかいないんだ。この世でたった一人の息子だもの」

「息子さんは匿名の骨箱のほうに置かれていると思います」と僕は言った。

前にも言ったようにここの骨箱にはほとんどに名前がついている。しかし、持って来た人が中に入っているのが誰なのかまったく知らせてくれないために、名前

編集後記

創刊号では、「毎年一回発行」という目標を掲げましたが、思いがけず、二〇一六年は年二回の発行となります。創刊号に関しては、一部の方から一冊のボリュームがありすぎて気楽に読めない、年一回の発行では間隔が開きすぎるのではないかという指摘を受けました。確かに雑誌の形態をとる以上は、年二回のほうが好ましいでしょう。また、他の『人民文学』海外版は平均百数十ページのようなので、一冊の収録作品は、今号くらいが適切かもしれません。ただ、創刊号の刊行がぎりぎり二〇一五年の年末であったため、この春に次号を出すことには相当の無理がありました。したがって、いくつか創刊号とは異なる点があることをお断りしておきます。

まず、収録作品のうちの半数以上は、すでに何らかの形で日本の雑誌に翻訳紹介されているものです。いずれも、再度紹介するに足る作品であること、これによってより多くの読者が得られること、再録に当たって改めて訳文のチェックと練り直しを行っていることを踏まえて、ご諒解いただきたいと思います。多様な本邦初訳作品の紹介は次号を期待してください。

関連して、原作の発表からやや時間が経過している作品が含まれます。『灯火』は「最新の中国文学の成果を翻訳紹介する」雑誌ですが、何年前までが最新かと問われると、答えは簡単ではありません。厳密に線引きすることなく、多少前の作品でも価値のあるものは収録していくと思っていただければ幸いです。

今号に詩を収録できなかったことは、大変残念でした。小説だけでなく詩を紹介するのはこの雑誌の大きな特徴ですから、次号ではぜひ、詩の掲載を充実させたいと考えています。その代わりに、今号では散文が一篇入りました。このジャンルも今後、収録の対象になっていくと思われます。

総じて言えば、今号は「臨時増刊」的な位置づけのものと考えています。言い訳の多い編集後記となりましたが、今後も試行錯誤しながら続けていきますので、ご支援をよろしくお願いします。

『灯火』翻訳監修　飯塚容

二〇一六年三月